

「よくいつまでも根気がつづくね」と何
度か大学時代の恩師角田文衛先生（現在平
安博物館教授・館長）からいわれたつと二十数
星霜、いまだに離れがたく、執念にも近い意
欲をそそがれられているのが東欧史の研究
である。幸いにして在満当時にロシア語を

〈私 の 研 究〉

東欧古代・中世史と取っ組んで

清 水 睦 夫

四・十三世紀のいわゆる中世のロシア）の諸問
題を遺物・文献史料の両面から究明せんと
資料を蒐集し、検討を深めた。もともと一
九五六年に日ソ国交が回復するまでは、露
語文献の入手は極めて困難で、東京狸穴の
ソ連通商代表部図書館に毎週ほど出かけ、
また英・仏およびカナダの公立図書館や、

やった関係も
あって、帰国
後は、日本の
ヨーロッパ史
研究ではどう
いうわけか白
紙同然の状態
で盲点とされ
ていたロシア
古代・中世史
に手を染め始
めた。最初の
うちは、専ら
ソ連の文献に
基づいて古代
ルーシ（西暦

大学その他の学術研究機関に資料の供与を
求めることなども多かった。

比較的、スラヴ諸語文献の入手が容易とな
った今日と違って、当時は奇遇に恵まれて
手中した書物に興奮して、夜眠られぬこと
もしばしばであった。やがて特別な事情か
らユーゴスラヴィヤやブルガリヤなどバ
ルカン諸国の通史（西暦前から今次大戦後お
よび現代）を執筆したことが機縁で（山川出
版社「東欧史」旧版）、ユーゴのベオグラ
ード大学、サライエヴォ大学、サグレフ大
学、リュブリャナ大学およびブルガリヤの
ソフィヤ大学やポーランドのワルシャワ、
ボズナン、クラクフの各大学などとも接渉
をもち、ロシア史にとどまらず、広く東欧
スラヴ古代・中世史を研究対象とするよう
になった。

スラヴ族の起源と初期の移動、国家形成
前のスラヴ族の社会構成と経済的基盤、封
建的諸関係成立と軍事組織、中世ローマ
（ビザンティオン）帝国と東欧スラヴ世界と
の歴史交渉および東欧へのギリシャ正教宣
布の実態と論理の問題、そして東欧キリス
ト教文化の特質などを主な研究課題とし
た。しかも、単にロシア史とか東欧史とい
った狭隘な枠内においてでなく、常に世界
史的な観点から東欧古代・中世史を位置づ
け、把握せんとつとめなければならぬ。第二
次大戦後の今日、その多くが社会主義国家で

あることを思えば、すぐに察知していただ
けるように、学問以前のすこぶる複雑な困
難さに遭った。すなわち二つした歴史学
上の諸問題の解釈の上にも、こつ以上複
数の原理や学派の存在を許さないというた
まえからか、政治的な圧力とマルクス・レ
ーニン主義的解釈の強要が少なからずい
ずれの国の学界にもうかがえたし、事実、名
も知れぬ私にすら、とくにソ連の学界から
「反マルクス主義的・非科学的」などと身
勝手な批判じみた非難をうけたこともし
しばしばであった。しかしロシア人ならい
知らず、日本人として私たちの憲法の第二
十三条で学問の自由を保障されているかぎ
り、何のちゅうちも懸念も覚えることは
なかった。

ヨーロッパ史研究における西欧中心主義
の払拭が強調される現今においては、なお
さらなこと、東欧諸民族の歴史的文化遺産
や屈辱と苦難の歴史をせん明にし、そこに
多い誤解と偏見をただすことは、少なくと
も彼らスラヴ族に尽きぬ愛着を感じ、その
往昔の姿を純粋に嚮慕させんと、岐路亡半
の嘆を唧ちつつもつとめる私にとって、せ
めてものめざすところと期している次第で
ある。

（香里中・高教論・世界史）